

家庭学習の習慣形成についての指導に関する アンケート調査報告

渡 邊 誠 一¹⁾

平成20年・21年に告示された小学校・中学校・高等学校の学習指導要領の総則に、「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、…(中略)…、児童生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない」と明記されているが、これは、学習習慣を形成する指導が学校教育の重要な課題として認識されたことを示している。

そこで、本稿は、家庭学習の習慣形成についての指導について、山形県の教員の意識、および実際にどのように実施しているか、その方法について明らかにすることを主たる課題としたものである。この課題に先立ち、このように学習習慣の形成が強調されるようになった背景について、昨今の児童生徒の家庭学習の実態を、文部科学省による全国学力・学習状況調査を通して分析するとともに、そもそも何故、学習習慣の形成が重要なのかを考察することから始めることにした。

文科省の調査から、多くの児童生徒が塾に通っていることもあって、家庭で独りで予習・復習する児童生徒は少なく、結局それが大きな学習習慣の形成の阻害要因になっていることが推測できる。一方、教員に対するアンケート調査からは、意欲的に学習習慣の形成に取り組んでいる様子が窺われた。しかし、学力テストの結果からは、教員の期待通りの成果は得られていないことが推測できる。

なお、本研究を進めるに当たって、平成21年8月に教員免許状更新講習を受講した先生方に対するアンケート調査を基礎資料とさせていただいたことをお報せするとともに、アンケート調査にご協力いただいた先生方に御礼申し上げる。

キーワード：平成20年度版学習指導要領 学習習慣 家庭学習 生きる力 自己管理能力

I. 児童生徒の家庭学習の実態

平成20・21年に実施された全国学力・学習状況調査の際に実施した児童生徒に対するアンケート調査から、調査対象となった小学校6年生と中学生3年生の家庭学習についての回答を整理すると、以下のようになる。

① 宿題への対応

表-1 「家で学校の宿題をしていますか」

| 回 答\調査実施年 | 小学校6年生 | | 中学校3年生 | |
|---------------|--------|-------|--------|-------|
| | 20年 | 21年 | 20年 | 21年 |
| している。 | 83.5% | 84.3% | 54.1% | 55.7% |
| どちらかといえばしている。 | 11.7% | 11.2% | 27.6% | 27.5% |
| あまりしていない。 | 3.7% | 3.4% | 12.6% | 11.7% |
| していない。 | 1.1% | 1.0% | 5.5% | 4.9% |

前述の表から、宿題として出された課題には、小学校6年生も中学生3年生もほとんどの児童生徒がしていることが読み取れる。ただ、中学3年生の約16%があまりしていないと回答していることが気になる。この数字の意味が、単に教師に対する反抗、あるいは生徒の怠惰に因るものであれば、生徒に意欲を喚起させるよう働きかけで解決できる可能性があるが、いわゆる「落ちこぼれ」という能力的な原因で宿題をしてこないということであれば、補習などの働きかけが必要になろう。

今や、少子化の下で、高校の入学試験の倍率も1倍を超えず、学力検査の成績は合否の判定資料として実質的にはほとんど用いられることなく「合格」して入学してくる生徒がいる。このような生徒の中には、中学校の教育内容を修得せずに進学してくる生徒がいることから、文部科学省も平成21年に告示された高等学

1) 地域教育文化学部附属教職研究総合センター

校の学習指導要領では、義務教育段階の内容を授業するよう指導している。文部科学省は、高校中退問題に対して、今までは総合学科の設置や単位制の導入などの制度上の改善で対応してきたが、それらの改善策も一定の効果はあったが、さらなる改善のためには、今回は指導内容にも踏み込んで、学習指導要領で、指導計画を作成に当たって配慮すべきこととして、「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした学校設定科目等を履修させた後に、必履修教科・科目を履修させるようにすること」と記載するまでになった。まだ、必履修教科・科目を履修させるという点で行政当局としての拘りはあるが、現実的な対応として一歩前進したと評価できる。

② 復習の実態について

表－2 「家で学校の授業の復習をしていますか」

| 回答\調査実施年 | 小学校6年生 | | 中学校3年生 | |
|---------------|--------|-------|--------|-------|
| | 20年 | 21年 | 20年 | 21年 |
| している。 | 16.5% | 17.8% | 12.5% | 12.8% |
| どちらかといえばしている。 | 27.1% | 28.6% | 27.5% | 28.0% |
| あまりしていない。 | 34.4% | 34.6% | 34.6% | 35.2% |
| していない。 | 21.8% | 19.2% | 25.1% | 23.9% |

この質問に対する回答から、小学生6年生は約55%が、中学校3年生は約60%が復習をあまりしていないという状況が読み取れる。特に、中学校3年生が「どちらかといえばしている」を含めても4割程度しか復習していない。このような実態には、かなり深刻に受けとめなければならないであろう。

その原因の一つとして、下記の統計にも見られるように、中学校3年生は、6割を超える生徒が塾に通っているという事情が考えられる。

表－3 「学習塾（家庭教師を含む）で勉強していますか

| 回答\調査実施年 | 小学校6年生 | | 中学校3年生 | |
|-------------|--------|-------|--------|-------|
| | 20年 | 21年 | 20年 | 21年 |
| 学習塾に通っていない。 | 51.2% | 52.1% | 36.2% | 37.1% |
| 学習塾に通っている。 | 48.5% | 47.7% | 63.3% | 62.7% |
| 回答なし等。 | 0.3% | 0.2% | 0.5% | 0.2% |

塾に通っている生徒の中には、学校で分からなかったことを塾で「復習」していると理解している生徒がいるのではないだろうか。実際には、学校で分からなかったことを塾でもう一度「教えられた」としても、真の意味で復習、つまり「学んだ」ことにならないこ

とが多々ある。このことは、全国学力・学習状況調査の結果から、塾に通っている生徒の成績が塾に通っていない生徒より必ずしも良くなかった事実からわかる。このことを理解している生徒はあまりいないであろう。また、塾に通わせている保護者もほとんど知らないであろう。やはり、学校で「教えられた」内容を一度は独りで「学ぶ」ことを経験させることが必要である。

復習しないもう一つの理由として、部活動が阻害要因と考えられる。平成元年告示の中学校学習指導要領ではクラブ活動が特別活動の活動内容として明記され、その一方でそれが部活動で代替できると説明されていた。そのこともあって、平成10年告示の中学校学習指導要領では特別活動の内容から削除されても、相変わらず部活動への全員加入を義務付けている学校がある。そのため、生徒は下校時間が遅くなり、家庭で復習する時間を確保することに苦労しているようである。ただ、部活動をしなくてもしっかり復習している生徒もいるので、部活動に全責任を押し付けることができないことはいうまでもない。

結局は、復習しない生徒は、自分で余暇時間を自己管理できていないということになる。学習習慣の形成という課題は、この時間の自主的管理という非常に難しい課題と取り組むことを意味する。これは生涯にわたる生き方に通じる課題であるだけに、そして、今や学校教育が生涯教育と基礎として位置付けられているだけに、学校教員はその意義を意識して指導すべきである。そのような意味からして、復習以上に予習をする習慣を身に付けさせる指導が重要になる。

③ 予習の実態について

表－4 「家で学校の授業の予習をしていますか」

| 回答\調査実施年 | 小学校6年生 | | 中学校3年生 | |
|---------------|--------|-------|--------|-------|
| | 20年 | 21年 | 20年 | 21年 |
| している。 | 13.6% | 14.3% | 8.6% | 9.0% |
| どちらかといえばしている。 | 21.9% | 23.3% | 20.0% | 20.7% |
| あまりしていない。 | 38.0% | 38.6% | 36.6% | 37.4% |
| していない。 | 26.5% | 23.8% | 34.6% | 32.8% |

予習については、当然ながら、復習以上に家庭で学習してくる生徒は少ない。小学校6年生が5割近くになろうとしているのに対し、中学校3年生は、しっかり予習している生徒は1割もない。「どちらかといえばしている」と回答している生徒を含めても3割程度である。中学校3年生にもなれば教育内容も高度化

しているのです、ある程度予習して授業に臨まないで授業を本当に理解することが難しくなるにも拘わらず。

しかし、予習の仕方を身につけさせることはけっこう難しい。また、まちがった予習は、授業の理解を困難にするので、予習の指導は復習の指導以上に的確に指導しなければならない。特に、算数・数学は、一度まちがって理解したものを正しく理解し直させるのは、家の改築が新築以上に手間がかかると同様に、大変なことである。予習した方がよい教科、また、その内容・方法をしっかり指導しておくことが予習の習慣形成を図る時には不可欠になる。

ただ、予習の習慣ができるようにするためには、それだけではなく、前述のように自己を管理する意欲・態度の喚起が不可欠である。そこで、次の「家で自分で計画を立てて勉強していますか」という質問に対する回答から、児童生徒の家庭学習に対する姿勢・意欲をみることにする。

④ 計画的な学習の実態について

表－5 「家で自分で計画を立てて勉強していますか」

| 回答 \ 調査実施年 | 小学校6年生 | | 中学校3年生 | |
|---------------|--------|-------|--------|-------|
| | 20年 | 21年 | 20年 | 21年 |
| している。 | 21.8% | 23.4% | 10.4% | 11.8% |
| どちらかといえばしている。 | 30.4% | 31.5% | 24.3% | 26.4% |
| あまりしていない。 | 33.1% | 31.8% | 40.0% | 39.1% |
| していない。 | 9.1% | 13.2% | 25.3% | 22.6% |

小学校6年生は5割を超えているが、中学校3年生は4割に達していない。児童生徒とも予習をしているという回答より割合が多いのは、彼らが復習をも含めて「自分で計画を立てて勉強している」と回答したものであると思われる。主観的であろうと、「自分で」ということは非常に重要で、家庭学習の習慣形成ができている一つの指標とも言える。そのように理解すると、上述の数字は、我が国の児童生徒の実態は問題があることがとらえることができる。

問題の一つは、自主的・計画的に学習している児童生徒、特に中学校3年生が少ないことであり、二つ目は、中学校3年生の方が小学校6年生より少ないことである。

人間の成長という観点からみて、学年の進行と共に本来は自主性・主体性は発達しなければならないところであるが、上述のように数字的には減少・減退している。確かに学習内容は高度化しているが、人間の知的・精神的な能力も年齢と共に発達している筈だし、と

りわけ中学校3年生までには思春期を経ていて、自我に目覚め、自主性・主体性も発達している筈なのに、このように学習の自主性・計画性に欠ける生徒が多いのは、非常に大きな問題である。

平成20・21年に告示され小・中学校及び高等学校の学習指導要領の総則に、「学習習慣の確立」が明記されたのも、このような問題意識が反映している。

平成14年頃から学力低下批判に対して文科省は「確かな学力」という言葉を用い、その構成要素として、①基礎的・基本的な知識・技能、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、③学習意欲の3つを挙げるようになった。その学習意欲について、平成10年の学習指導要領までは学習意欲の喚起までで、学習意欲の結実とみなされる学習習慣の確立ということばは記載されていない。今回改訂された学習指導要領では、学習意欲については、さらに学習習慣の確立まで導くよう求めている。

そのねらいは、思考力・判断力・表現力を身につけさせるために授業時間数を増加させて児童生徒がゆとりをもって学習できるようにしたことと繋がる。学習習慣の確立は、自ら学ぶ機会の増加になり、結果的に思考力・判断力・表現力の育成を促すことになると考えられる。

平成20年の中央教育審議会の答申では、学習習慣の確立のねらいは、主として以上のような考えから説明されているが、忘れてはならないことは、平成元年の学習指導要領から生涯教育を意識した考えが登場していることと結びつけて考えねばならないことである。つまり、この学習習慣の確立というねらいには、学び方の習得、さらには生涯に亘って主体的に生きていくための力、即ち、「生きる力」を、問題解決能力という「学力」だけでなく、自己管理能力の育成も含めて考えねばならないということである。

II. 教員の学習習慣の形成に関する意識と方法

(1) 教員の意識

① 学習習慣の形成をする時間帯について

表－6 学習習慣の形成をする時間帯について

| 時間帯 \ 校種 | 小学校教諭 (97) | 中学校教諭 (43人) | 高校教諭 (29人) |
|----------|------------|-------------|------------|
| 学級会・LHR | 72人(74.2%) | 35人(81.4%) | 16人(55.2%) |
| 教科等 | 60人(61.9%) | 34人(79.1%) | 24人(82.8%) |
| 道徳 | 6人(6.2%) | 1人(2.3%) | — |
| 総合の時間 | 2人(2.1%) | 1人(2.3%) | 3人(10.3%) |
| その他 | 23人(23.7%) | 9人(21.0%) | 6人(20.7%) |

小学校の教諭は、学級担任制ということもあって学級会の時間に（特別活動の学級活動として）指導していることは容易に納得できるが、教科担任制をとっている中学校の教諭が教科の時間と同じくらいに学級会の時間を活用していることは意外であった。中学校教諭の場合、教科指導する際、宿題を課したり、復習あるいは予習の方法の指導をしながら家庭学習の習慣形成を試みてきたという回答が予想されたが、結果は学級会の時間も活用しながら指導してきたという回答の多さは注目される。つまり、中学校教諭が、小学校の教諭と同様に教科の時間だけでなく、学級会の時間でも学習習慣の形成に意欲的に取り組んできたということである。

一方、高校の教諭が小・中学校の教諭より教科の時間を多数選択しているのは、学習習慣の形成を生活指導というよりは学習指導の一環として考えている傾向が強いことを示唆している。

②習慣形成を指導するのに適切な時期について

表－7 習慣形成を指導するのに適切な時期について

| 学期\校種 | 小学校教諭(97) | 中学校教諭(43人) | 高校教諭(29人) |
|-------------|------------|------------|------------|
| 一学期(4・5月) | 84人(96.6%) | 41人(95.3%) | 18人(62.1%) |
| 一学期(6・7月) | 21人(21.6%) | 10人(23.3%) | 9人(31.0%) |
| 二学期(8・9月) | 32人(33.0%) | 8人(18.6%) | 3人(10.3%) |
| 二学期(10~12月) | 16人(16.5%) | 14人(32.6%) | 3人(0.3%) |
| 三学期 | 17人(17.5%) | 7人(16.3%) | 5人(17.2%) |

どの校種教員も一学期の4・5月を学習習慣の形成に最も適した時期と考えている。その理由は、学年始めで、教員各自がそれぞれ担当教科の学習の仕方を指導し、その際、予習や復習の仕方などの家庭学習の仕方も指導するなど、学習習慣の形成も意図した指導をしているからと思われる。生徒も、学年が変わったり、担当教員も変わったりして、気分一新でき、チャンスでもある。もちろん、教員は生徒のこのような変化も察して、学習意欲を引き出して習慣形成の機会ととらえていることがこの時期が最適と考えている理由であろう。

学年始めの次に適している時期として考えているのは、小学校教員は二学期始めの8・9月なのに対し、中学校教員は二学期後半の10~12月と考え、また、高校教員は一学期後半の6・7月とするなど、校種によって違いがあるのは興味深い。小学校教員は、学期始めはいつももう一度指導の仕切り直しが必要と考えているのであろう。中学校教員は、3年生は部活を引

退し、1・2年生はスポーツ大会の新人戦が終わって、秋の夜長に勉強に当てる時間が一番とれる時期と考えて、10~12月を選んだものと思われる。高校教員はとにかく学年の早い時期に習慣形成しておいた方がよいとして、6・7月を選択したと思われる。

③習慣形成するのに適切な学年について

表－8 習慣形成するのに適切な学年について

| 学年\校種 | 小学校教諭(97) | 中学校教諭(43人) | 高校教諭(29人) |
|--------|------------|------------|-----------|
| 小学校1年生 | 40人(41.2%) | 12人(27.9%) | 3人(11.1%) |
| 小学校2年生 | 26人(26.8%) | 6人(14.0%) | 2人(7.4%) |
| 小学校3年生 | 29人(29.9%) | 14人(32.6%) | 4人(14.8%) |
| 小学校4年生 | 12人(12.4%) | 9人(20.9%) | 5人(18.5%) |
| 小学校5年生 | 16人(16.5%) | 2人(4.7%) | 4人(14.8%) |
| 小学校6年生 | 15人(15.5%) | 5人(11.6%) | 6人(22.2%) |
| 中学校1年生 | 0人 | 5人(11.6%) | 5人(18.5%) |
| 中学校2年生 | 0人 | 0人 | 0人 |
| 中学校3年生 | 1人 | 0人 | 3人(11.1%) |
| 高校1年生 | 0人 | 2人(4.7%) | 1人(3.7%) |
| 高校2年生 | 0人 | 0人 | 0人 |
| 高校3年生 | 1人 | 0人 | 0人 |

学習習慣の形成に最も適切な学年として、小学校教諭は小学校の1年生を、中学校教諭は小学校3年生を、高校教諭は小学校5年生を挙げている。どの校種の教諭も小学生時代に習慣形成すべきと考えている点では共通しているが、校種が進むに従って学年が上がっていくという点では違いがある。

これは、中学校や高校の教諭は、小学校の低学年でなくともよく、教科内容がある程度明確化する学年の方がむしろ適切と考えていることを示唆している。生徒の学業上の躓きの時期について、中学校教諭は小学校3・4年生を、高校教諭は小学校5・6年生を挙げていることと符合する。

このように、今回の調査から、山形の教員は、学習習慣の適切な時期を教育内容に合わせて考えているようである。それなりに一理ある考えである。

一方、中央教育審議会は、平成20年1月の答申で、「家庭学習も含めた学習習慣の確立に当たっては、特に小学校の低・中学年の時期が重要である」と述べている点では共通しているが、この文章の見出しが、「学習意欲の向上や学習習慣の確立」で、学習習慣を学習意欲と一体的に考えていることから、教育内容よりは学習意欲を習慣形成の契機として考えていることが理解できる。中教審は、「分かる喜びは学習意欲に

つながる」という考えを前提にしていることが、それを体験する機会が最も多いと思われる時期として小学校の低・中学年を推奨したものと思われる。

しかし、本当に小学校低・中学年から学習習慣が形成できるかは疑問である。その学習習慣の内実が問題である。

(2)習慣形成のための指導方法について

《小学校の教員の場合》

指示された課題を宿題として課すという方法をとっている教員も多いが、家庭学習の内容を指示せず児童自身の自由裁量に任せるという方法、いわば自主学習ノートを作成させる方法で指導している教員も多い。

その際、自分で内容を決められない児童には教員が「自学メニュー」を用意して、児童に選ばせて取り組ませるという工夫をしている教員もいた。また、自主的な学習をクラス全体に普及させたり、質の向上を図るために、児童生徒のノートを相互に見せ合ったり、他の児童に模範となるようなノートを学級通信によって児童・保護者に披露するなどしている教員もいた。

学習習慣を生活習慣の一環として一日の生活時間の計画表を作成させる中で、学習習慣の形成を図ろうとしている教員もいた。学校外での一日の過ごし方を考えさせる中で、家庭学習をいつ行うかを計画させる方法である。その際、各自自分の計画案を再考させるという意図を籠めて、児童相互に計画案を意見交換させるという機会も用意した教員もいた。

宿題を活用するという教員も多かった。保護者も宿題を要望する場合が多いので、その期待に応えている面もある。宿題は必ずやってくるべきということを一年生の時に教えておくべきと思っている教員も多かった。それで、宿題をして来ない児童に対しては、学校でさせるということで、それを体験的に認知させるという回答を寄せた教員もいた。

また、宿題や自主的学習を継続・習慣化させるために、特に小学校の教員は毎日の点検・チェックを大切にしていることが読みとれた。その方法も、シール・スタンプ・ポイントなどによって、その努力を評価する視点で行っているようである。そして、その方法が効果的と考えている教員が多いことも読みとれた。

宿題の内容について、授業の大事なところを復習するところとしてそれをノートに書きこませたり、予習の内容を指示してそれを宿題に課すなどの工夫をする教員もいた。

家庭学習の習慣形成を指導する際、特に小学校の教員は家庭との連携を重視している様子が垣間見えた。学級通信・たよりや保護者懇談会を通じて、家庭学習の必要性について伝えたり、宿題への協力を要請している様子が回答から読み取れた。家庭学習の継続性・習慣化を図るためには、保護者の励ましが効果的と考え、それを保護者に訴える教員もいた。

《中学校教員の場合》

指示された内容を宿題として課し、そのことによって習慣形成しようと考えている教員が最も多かった。そのことは、下記の平成21年の全国学力・学習状況調査の際に実施された学校（教員）に対する質問調査からも裏付けられる。

表-9 全国の教員の家庭学習（宿題）の指導に関する調査結果

| 質問事項 \ 選択肢* | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---|-----------|-----------|-----------|----------|
| (1) 国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか | 41.1 % | 46.0 % | 12.3 % | 0.3 % |
| (2) 国語の指導として、家庭学習の課題の与え方について、学内の教職員で共通理解を図っていますか。 | 24.3 | 46.4 | 25.6 | 3.2 |
| (3) 国語の指導として、生徒に与えた家庭学習の課題について、評価・指導を行いましたか | 49.1 | 44.7 | 0.4 | 0.4 |
| (4) 数学の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか | 45.6 | 45.1 | 0.7 | 0.4 |
| (5) 数学の指導として、家庭学習の課題の与え方について、学内の教職員で共通理解を図っていますか。 | 24.6 | 46.6 | 24.2 | 3.4 |
| (6) 数学の指導として、生徒に与えた家庭学習の課題について、評価・指導を行いましたか | 43.0 | 44.9 | 6.4 | 0.4 |

*選択肢の1：よく行った（当てはまる）。

2：どちらかといえば、行った（どちらかといえば、当てはまる）。

3：あまり行っていない（どちらかといえば、当てはまらない）。

4：全く行っていない（当てはまる）。

家庭学習の課題（宿題）の与え方として、中学校では、副教材としてワークや問題集を使用していること

が多いこともあって、その中の一部を宿題に課すことが多いようである。

一部の教員には、難易度別にプリントを用意し、自分で選択させるという工夫をしているとの回答もあった。昨今では、習熟度別にクラス分けして指導している教科もあるので、宿題もそれなりに工夫しているであろう。習熟度別指導の効果については疑問もあるが、分かるように指導することは非常に大切なことであり、宿題も習熟度に合わせて課すことは非常に重要なことである。

多くの教員は、宿題を通して家庭学習の習慣形成をさせようとしているようであるが、別の方法で指導している教員もいた。ある教員は、授業で分かったことを確認するように、復習を中心とした自習ノート作りをさせるという方法で、また、ある教員は、生徒に関心をもった新聞記事を切り抜きそれに自分の意見を書かせるという方法で指導をしているという回答を寄せていた。

また、毎日家庭で学習させることは難しいが、テスト前なら生徒もさすが成績を気にするであろうとして、この機会をとらえて生徒に学習計画を立てさせる指導をしていると答えた教員もいた。

学習指導要領では、学級活動の時間に「なぜ勉強するのか」という、学びの意義・必要性を説きながら指導することを推奨しているが、実際はその教育効果は薄いようである。

教員一人一人はいろいろ工夫しながら家庭学習の習慣形成に努めている様子も見受けられるが、実際にはその効果はあまり見られないようである。

その要因の一つとして、前述の表から読み取れるように、教員間に家庭学習の課題の与え方について必ずしも共通理解が図られていないことである。そのことが、結局、教員全体の指導の一貫性・継続性を失わせ、生徒の家庭学習の習慣形成を困難にしていると考えられる。

また、もう一つの要因として、アンケートで適切な時期として、中学校教員も小学校低学年を選択していることから、中学校段階で家庭学習の習慣形成するには既に手遅れと考えていることもあると思われる。そのことが、結局は、家庭学習を強制的な宿題で行わせることになる要因であろう。

いずれの方法であっても、自分で勉強内容を決めて学習する体験を思春期・青年期前期の中学生時代にすることは、自由な時間を自主的に管理する体験をさせるという点で、非常に大切なことである。

《高校教員の場合》

宿題を課すよりは、先ず復習・予習の仕方という学習方法の指導をする必要性を訴えている。それは、中学校までに復習や予習の仕方を習得してこなかったのが一番の理由であろう。平成17年度に実施した高等学校教育課程実施状況調査では約4割が平日学校の授業以外に全く、またはほとんど勉強していないという調査報告があることから、このような指導が適切なのである。それで、復習するように指導するためには、先ずもって授業でノートのとり方の指導が必要と考えてか、入学早々の4月にその指導をすると回答をした教員がいた。

宿題を出すという回答も多かったが、宿題を課しても、能力的な問題から提出できないとみて、宿題による習慣形成を諦めている教員もいるようで、このような教員は一日の生活記録をとらせて学習への心構えをつくらせることから始めていると回答した教員もいた。

高校の教員の回答には、学習習慣の形成の具体的な方法についての回答欄が白紙の場合が多かった。それは、中学校教員以上に、習慣形成の指導は既に手遅れと考えている教員が多いことを示唆している。

結 び

平成20・21年に改訂された学習指導要領では、その総則のところ「学習習慣の確立」ということが記載されているように、学習習慣の形成を非常に重視していることがわかる。それは、前述の全国学力・学習状況調査の調査結果に、文部科学省は昨今の児童生徒の状況に危機意識をもっている証左ともいえる。

それに対して、教員もほとんど同じ意識をもっていて、いろいろ工夫しながら家庭学習の習慣形成に努めている様子が窺われるが、しかし現実にはなかなか効果が上がっていない。

その原因の最大の理由が、習慣形成の方法として、多くの教員が強制的な課題（宿題）に頼っていることである。家庭学習の習慣形成は、家庭での自由時間の過ごし方と関わっていることなので、児童生徒の自主性がカギを握っている。それなのに、ほとんど自主性を無視した強制的な課題（宿題）を課して、それを機会に習慣として定着させることは無理がある。つまり、習慣形成に結びつけるには、児童生徒の自主性を引き出すことが肝要である。学習意欲を喚起させなければ、学習習慣の形成は無理ということである。意欲は、強制や義務感ではなかなか起こらないであろう

し、起きたとしても永くは続かない。

学習意欲は、達成感・成就感が伴うことで、高まる。その機会が得られるように導くことが、重要となろう。そこで、そのような達成感・成就感を与えられるようにするには、どのような方法が考えられるか。

文科省の先の学校（教員）への質問事項にもあるように、事後の評価・指導をしっかりすることも大事なことであろう。児童生徒は、他者、特に教員に認められることを大きな喜びとしているので。

しかし、教員による評価だけでは、指導教員が交替した場合、教員による対応が変わることもあり、習慣形成として定着するかわからない。

達成感・成就感は、他者による評価よりは、やはり自分自身で評価して感じた方がより実感できるものである。それを一番実感できるのは、授業で学習したことがわかることであろう。さらには、それを類似の課題でも応用できることであろう。つまり、復習がしっかりできた時に満足感が得られ、その満足感が次に学習意欲につながるであろう。

家庭学習の要点は、復習ということであるが、その復習のためには、学校での学習が重要になる。学校でしっかり学習してこなければ、塾で勉強しても成績が伸びないし、ましてや家庭で独りで学習しても分からないであろう。それ故、独りで学習する気も起らないであろう。

従って、家庭学習の習慣形成は、実は学校での教員の指導がカギを握っているといえる。学校で分かる授業をすることが不可欠な要件である。そもそも、家庭学習の基本は、学校で学習したことを確認することなのだから。

分かる授業とは、授業のポイントが児童生徒にも理解できるということである。ポイントが理解できれば、復習の仕方も分かるであろう。つまり、学び方の基礎を身につけたことになる。さらに、分かる楽しさを体験したならば、もっと深く知ろうと意欲も出てくるであろう。つまり、予習する意欲も出てこよう。このようなことの積み重ねが、結果的に自主的・計画的に学習する習慣、即ち、家庭での学習の習慣形成につながるであろう。

〔付記〕 教員に対するアンケートの集計は、門脇麻実さん（地域教育学科4年生）に協力してもらったことを記す。

参考資料：アンケート票

学習習慣の形成に関するアンケート

以下の質問事項に該当する箇所（番号）を○で囲んでください。

1. あなたの所属する学校の校種を教えてください。
 1. 小学校
 2. 中学校
 3. 高校
 4. 特別支援学校
 5. 幼稚園
2. あなたの担当教科を教えてください。（中学校・高校の先生のみお答えください。）

（ ）
3. 学習習慣の形成をどの時間帯で指導していますか。
 1. 教科
 2. 学級会・LHR（学級活動・ホームルーム活動）
 3. 総合的な学習の時間
 4. 道徳
 5. その他
4. 学習習慣の形成に関わる指導をいつ頃行っていますか。
 1. 一学期（4・5月）
 2. 一学期（6・7月）
 3. 二学期（8・9月）
 4. 二学期（10～12月）
 5. 三学期
5. いつ頃までに、学習習慣の形成をしたらよいと思いますか。
 1. 小学校1年生
 2. 小学校2年生
 3. 小学校3年生
 4. 小学校4年生
 5. 小学校5年生
 6. 小学校6年生
 7. 中学校1年生
 8. 中学校2年生
 9. 中学校3年生
 10. 高校1年生
 11. 高校2年生
 12. 高校3年生
6. 学習習慣の形成について、現在あるいは過去に、あなたが指導した方法を教えてください。

ご協力ありがとうございました。